里見八犬傳

第六編

巻廿六

へ13
709
87

遠門 13
號 709
卷 87

曲亭馬琴著

八犬傳

第十六輯

明治三六年十月九日購求

東京名山閣版

八犬傳第九輯巻之三十六 目録

稗史小説の巧致とるべき。よく情態を寫し得て異聞奇談人意の表ふかきもの多し。獨軍旅攻伐の談ふ至りて。里巷の小児も悦ぶるを。士君子の為ふ道ふ足ぬ譬ひ水滸傳の如しも。七十回より下ふ招安の事あり。宋江盧俊義等。其徒一百八人宋朝の為ふ遼を伐ち方臘を征するふ至りて。是を七十回までの新奇巧致の筆ふ比れば。頗劣れるふ似たり。そは金瑞い七十回までを施耐菴の作とし。七十回より下百二十回までを羅貫中の作とし。評續水滸傳とも。毛鶴山が如し。善小説傳奇見る者とへども。猶金瑞が評言を信容く。其七十回より下を續水滸傳とのしりいふ。そは吾堂ふ見るよりあり。抑水滸傳一百二十回。羅貫中が一筆ふ成る所其證文ヨメくあり。然るふ彼小説を評定をる。李贄金瑞ら。ちいばしくその他明清の文人墨客水滸をの者多れども。一人として彼作者の。意量の隱微をと悟れるなし。その故ふ吾亦戯ふ水滸の隱微を發揮圈字評して。命けて。

拈花窺談といふもの然りけれども老眼年々に衰邁して今い筆硯不如意なる故
果もゞたや否を知ざるを左まれ右もあれ本傳第九輯に至りて二三十回皆軍旅攻伐の事
ゝ多くして雖貫中の大筆なりとも俗語雜劇詩詞歌謡の如くなるを況や己が如き
輩才のゝ本傳力戰の談はもとも看官の飽きなくなるに最難しとも難ずべき技を遮莫水
滸に征伐一度に至りて百八人の義士悉く陣歿して最後に宋江李逵も毒を仰ぎて
死に至れり看官遺憾しく思ふれども如何ぞ勸懲に係る所果敢なく局を結ぶ則作
者の用心を然れば本傳に用意彼と同ゝなるべし。その力戰の故なりて里見十世の栄へ開花
の実の約束なり且性情仁義の致す所実に是大團圓の欽びを盡すに足るべし看官本
傳の水滸に模擬せり所なれども知れども作者の用心始より水滸に因ざると知るべし
然るとあるに後世金瑞と相似る評者あるべ九輯軍旅の三十回を誣く續八
犬傳として五品筆をもとゝもあらん狹夫隱くるを求め怪を述作る小説野乘の

果敢なきも其大筆に至ては必作者の隱微あり是を弄ぶ者は甚多く是を悟る者の易
ゝ思ふ昔も今も同じかるべし。その故に五品常に連者の戲墨を評する五禁あり
所謂假とりて真とし備らんとして求る事評者に其理論を好む所へ引つる作者の深
意を生ずして只其年紀をのの合ざるを見出さんく欲する俗に云穴捜の類なる前に約
束あるものの人名を急に結び出さで忽に待なく催促する事神異妖怪に始めて終なく
出没不可思議なる者に然るを其出処来歷を詳にせんく欲する其消滅して終る所の安
定ならんなるを求るに惑ひのみ作者の本意なるを大凡その五禁を知るべし。吾戲墨を
評する者あらば真実の知音なるべ宜に是非の辨なれども人我泰平の餘澤なるべ
飽まで食ひ温に被て文場に遊ぶ者米錢をもとめて暗譚に春の日を銷ぬる彼も
一時の此も亦一時なるべ柳吾戲墨物の本の殊に時好に稱ひし弓張月及南柯夢
胡蝶物語小冊子傾城水滸傳新編金瓶梅その他猶あるべ就中本傳に世の人

いと喋々あれども愛要復りて弄ぶ徒ふ江戸及浪速なる戯場を屋是ふよりて戯墨の
ゆゑ〻を見れば又大阪老浄瑠理ふ作れるあり。其院本ハ長編ゑ四冊だらり出ちとる改ゑ
況錦繪ハ八犬士を画ける者京江戸大阪ゑ年々ふ彫りて今も猶出ちあり呂是
のごふあるべし。諸神社の画額及燈籠ふも犬士を画ざるハ稀ゑ式。筧頭及布簾剥製の金
襴純子或ハ煙包團扇紙鳶小児の肚被ふまで画けを見れば然ゑ閭巷軍記の岐坊講釈ふも
ことさく本伝を讀てゑて世渡りふ倣せるあり。ともぞ人の告るふ後て知りぬ其時尚ふ稱ふとかの
如ふ至れるハ我ゑ〻ちも敬鳥くまぞふへと怪くもある哉已戯墨ふ遊びとりゑ虚ふ五
十年客舎ふ盧生の枕を借らでも稍覚ぬべき比ゑれば細字ハ懶く不如意ふ成ゑ然ば本輯
又ハ巻を稿ト果さば其折則硯の餘滴ふ戯墨ゑ足を洗ま欲ゑ筆硯讀書皆排斥
ゑ。徐ふ餘年を送るふ至ゑば静坐日長く思慮を省ぶく復少年の如くなるべし。

天保十一年肆月小満後五日　蓑笠漁隱

本傳前板第九輯巻之二十九以下五冊校閲遺漏補正抄録

○二十九の巻　三丁右　揔目録　頓智之功　當ふ揮ゑ作るべし　二十の巻の初丁本文の題目ふ揮ゑとあり正しとまだし

同巻　十一丁ノ右　二行　野豬犲狼　豬ハ豬の悞寫　當ふ豬ふ作るべし

削もて忽焉と　もの下のてハ衍字　削り去るべし

○三十の巻　二丁ノ右　四行　兵を拙策を貴ぶ　策ハ速の悞寫　當ふ拙速ふ作るべし　同巻　二十九丁左　十一行

津の中　津ハ律の悞寫　當ふ律ふ作るべし

○三十二の巻　二十一丁ノ右　五行　厨のうへぞ　傭訓　たりうりやと作るべし　同巻　二十三丁左　二行

勁風　勁ハ悞刀ハ　當ふ勁ふ作るべし

その他聊るハ畧ゑ作者老眼衰邁細書を見るふ詳ゑ再校ハ發兒の後ゑれば。
追てゑふ抄ゑるのゑ諸君子ハ披閲の折雌黄を施してゑく補れば幸ひゑむ。

南總里見八犬傳第九輯下帙下編上總目録

巻之三十六

第百六十二回　悌順慈善流生口　莊介信義避二之舍

巻之三十七

第百六十三回　莊介設伏夜擒將衡　小文吾奮勇擊鷲熊

第百六十四回　殘兵奪刄賣窮君　水軍寄艦載敗將

巻之三十八

第百六十五回　挾一虜現八斷橋梁　放火豬信乃燒戰車

巻之三十九

第百六十五回下　題目同前

巻之四十

第百六十六回　以衆俠孝嗣援源公子　果西使來仁敗走景春

八犬傳第九輯一百六十二回以下五巻目録終

賢而事賢
譬以魚水
大樟村主俊故
盾持傅杖朝經

愚山人
赤熊如牛太猛勢
上毛和四郎東三

神明有祭祀之俗
仁君無不敬之臣
印東小六明相
荒川太郎一郎清英
周兼吉

白石城介重勝
朝寧
小幡木工頭重良
朝長
寿房丸

木曽義仲李元
狐龍精石
羊用人

火牛勝萬馬
勍風何但水
継橋綿四郎高梁
真間井樋二郎秋李
彫春藏

本傳前板第九輯巻之五十二以下五冊校閲送漏補正抄録

○五十三の巻 十五丁ノ右 八行 嘆曰氣して 曰ハ口の誤カ多

○二十四の上 十丁ノ右 八行 従ふ 従の一点 同 十丁ノ右 七行 美りふひ女 傍訓のうけいれ 誤カ多

同 十五丁ノ右 四行 諭へ 諭の一点 同 十六丁ノ右 十一行 蕭荷 荷ハ何の誤寫多 當ハ蕭何ハ作るべ

○二十四の下 十六丁ノ左 八行 猿樂 誤寫多

○二十五の上 初丁ノ左 二行 燈燭の下ハ 傍訓の誤寫下かの如し 同 四丁ノ右 七行 憤り 誤ハ誤カ

同 四丁ノ右 一行 津備 備訓つのもを 影ハ誤 當ハ作もべし 同 十二丁ノ左 九行 原来和女ハ 傍訓の上のもハ

ハの誤寫多

さていもぢよらかくの如くも

亦賣出ちし後ハ知音の見出せしを抄録しくりて看官ハ

便る者前の如し。

再校抄録終

南總里見八犬傳第九輯巻之五十六

東都 曲亭主人編次

第百六十回

悌順慈善生口を流せ

莊介信義二人舎を避く

復説滿呂再太郎信重安西就介景重ハ然しも負しく思ひて滿呂復五郎立里時ゞ矢場ハ敵の鉄砲ハ撃られく水底ハ淪こゝハ勢ひ折けて哀ハ堪ぎ只共侶ハらも歎ける志と励しゝ即使再太郎が意見ゆく就介と技被ら又那敵の由断ハ八犬今井の柵の横隊るハ柳の枝垂しゝ邊ハ泗ぶ彷潛び途就くハ入らまく欲ふ怪しむべし件の無る柳の枝股ハ其手非手人ハて抗て我を招くゞ如し朦朧ハて安定るゝを熟とよく見れハ其人の為体烏草紙の身甲ハ釬脛衣して腰ハ両刀と帯るゞ宛重時も似たる再太郎と

就仆ハ倶ニ驚キ且訝リテ左右ヲクハシク我マヘ登時再太郎眉ヲ顰メテ安西和殿ハ如何見ル他ハ必我大人ノ亡魂ニテアランヌ勇士ノ忠魂死シテモ亡ゼ今我ノ為ニ導ケテコノ柵内ニ悄入ラセテ倶ニ是軍功ヲ立ラセントテ帮助ケヲ鬼謨ヲ示ベケレトハ就仆黙頭テ然也々々ソヽクトヨロシ倶ニ尚ヽ合ヲ俯拝シテ南無大人精霊同志異體死生其方差ハリトモ我一雙ノ微力ヲ志ノ已ニ成ルヲ惟ヒコヽニ影ニ立ち形ニ添フヲ障ルヲ今アノ柵ニ潜ビ入ルヲ成サセヨ弥陀佛々々弥陀佛と両聲ニ祈リ念ルレバ樹上ノ人聲ヲカケク登ヨ再太郎ヨ就仆ヨ我ヲ死セリト思フ彼我ハ方僅那溝戸ヨリ敵ノ發ル矢ー大銃ニモ推レザリシカ一旦ハ其勢ヒニ逆ヘクモ忽チ波ノ底ニ淪ミテ再度ノ丸ヲ避ケルヲ因テ意ニ件ノ大銃ハ溝戸ヲ守ル敵ノ雑兵ヲ我悄近就クヲ見ルテ毂ヲ殺サンとその所ヲ或ハ一時半時毎ニ他ノ

必水面ニ空銃ヲ發ルテ其成ノ為ニ閑ヲ窺ヲ射方ノ士卒ニ示ルヲ故ニ我身ハ聊モ恙ナク然ケレトモ那里ハ已ニ敵ノ兵ノ睡ルヲ在ルヲ猜ルヲ出ゼ水底ヲ潜リ潜リ辛クヲ渡ル洲ニ剛才泅ギ着テ内ヨリ年ヲ這柳ノ枝ニ攀リ樹陰ニ敵ノ虚実ヲ覘ヒ窺ヒ舊処ヘ入ルヲ然而汝達ニ便宜ヲ示シテ共侶ニ思ヒ折ヨクヨクヲ聚合ヒ事ノ成ル祥ヲ定メ情ヲ報知ヲ再太郎と就仆ハ聞テ憶ヒ崔曜ヲ執ルヲ大々ヲ原来カノ折敵ノ溝戸ヨリ發ルヲ大人ハ恙ナクヲ欣然トシテ悟ルヨリモ毂ヲ殺レヌルヲ思ヒ涙ノ涯リ暴河ノ水モ増ヲクヲ嘆ヒテ知ヲ在リカ非如両個ノ微力ヲ大人ノ志ヲ紹ヲ退ヲ倶ニ成ルヲ人ニ面ヲ向ケカ思ノヲ那溝戸内ハ敵ノ守ノ固ケレバ大人ハ果敢ル毂ケレハ這頭ハ守ノ敵兵ヲ解ルヲ先ヲ這頭ヨリ潜ビ入ルヲ思ヒ差ヒヲ共ハ

侶ふ戰死せんと示ち合ふ辛くして方偖泗ゞ就けるふ大人ハ反く恙ふ早くもちふ
まゝ〜ゝ憂ひを轉じ大喜大幸ゝ為ふ上や伯ゝ吁悅〜や娯〜やと心の隈どうち明て
悄めゝ告る両個の少年惴るゝ重時推禁めゝ噫音高〜いそくべらゞ内を
見一豆ふ幸ハふ〜ゝ焚捨る冊火の殘れるゝ守の敵兵あるゝ我ふ續けと呀
ゝふ〜て内へ閃りと飛降ゝハ再太郎も就れも是ふいよく力を沼て倶ふ無ゝ枝ふ
攜りゝ欅拳登り塀を踰て悄地ふ内ゆゝ入りふけ。恁而満呂復五郎重時ゝ両
個の少年と共侶ふ猶も這柵内の敵の虚実を覘ふ才ふ燃る冊火ふ背を推
向け膝を抱ゝく打眺る両ゝ個の雑兵在るゝ外ふ守の士卒ゝ為けれゝ憶ゝも
うち合咲れてゝ為ゝく冊火の燃柴ゝ掖合ゝ立別れて東西ゝ守屋の檐ふ
火を放ハふ満呂再太郎信重ハ心早ゝ少年ゝ為れハ初冊火を掖出ゝ時那打眺
ゝる雑兵の膝下ふ鉄砲あゝそゞ中ふ火素ふを結びて九さハ竜ゝを奪略ゝ左ゝふ

引提ゝ。倶ふ軒遇突智の梓ゝを做ゝ程ふ時間河風吹暴れて寒ゝ夜ゝれハ火の
勢ハ禁むべくもあらざりけ。重時ゝもゞ火攻ハ瞬間ふ燃廣ゞて。車輪の像ゝ猷ゝ
飛ぜハ這柵内ふ在りとある士卒們ゝ睡臥るゝ睡らざりゝもあゝふとゞろふ驚
ゝ慌ゝ走り出ゝ。倶ふ火を防ゞて。うち滅まゝ欲ゝれども既ゝ守屋毎ふ火の蒐ら
ざる隈ゝもるけれハ。誰ゝうゝ及ぶゝ相罵ゝ打擇ゝて小髮を焦ゝ火を踏て叫び滾ぶ
ゝ時第二の守屋ゝ。柵の頭人小越小權太表練い茸黄紙の身甲ふ
二紅曜呢の戰外套をうち披ゝ騏の馬ふうち乘ゝて眉尖刀ゝ挾ゝ従ふ士卒ゝ
先ふ找めゝ。乘り出ゝ。聲高ゝふ兵毎ゝ呼ゝ。當所ハ河上ゝ素より
水ふ匿ゝ〜ゝふ疾汲上ゝて火を滅さゞゝと連ゝふ叫喚れハ諸隊の士卒ゝの一言ふ
奬されゝ氣ゝとり直ゝて金太鳥醬鈎を打振ゝ〜滅禁んと競ふゝ蒐ゝハ表練威
風凛然ゝとゝて馬を風上ふ立眼を配ゝ〜只顧下知を做ゝ程ふ満呂再太郎信重ハ

間に方より寇近就て。携さりける鳥銃の火蓋を鎖く捏と放せば小越小權
大表練い胸骨托地と撃砕れて馬より隊て死んでけり是ぶど敬駕く諸隊の士
卒も原来内伐の者ある歟然るぞハ敵の間諜兒ぶ放ち火ぶぞわんぞらむ啓ゝ
人々疾猟出て。捕捕むやと四馬るのを找むも找ぶざりーも噪ぶ立る癖ゐを同士
撃ゐ老命を殞し。痍を負ふ者もヨヌ。るける事の紛れ亦重時い再太就ゆ共侶ふ
這里ふ顕れ那里ふ隠れて。揮撃ゐふ倣ゐ。ゆの柵内ふ名ある兵も只這二個の敵の
為ふヨヌく首を喪ひけり。有徒一程ふ犬川荘ゆ義任ハ其隊の軍兵一千五百餘名
數十箇の戰艦ふ乗ゐを従へさ。あの夜丑三の比及ふ闇ゆ紛れて今井ゐ敵の
柵ふ推寄ゐふ満呂復五郎重時ゐ。ゆ柵と伏攻して剰再太郎信重ぶ
那柵の第二の頭人小越小權太を撃ゐ捕ゐ折ゐければ柵の士卒ゐ一人として防
ぶ戦ふ者あるぞ荘ゆ旦足ふ便りを失く。士卒を找めく溝戸を撃ゐ破ゐ乗

入々々諸勢齊て岸ふ登りて。咄と揚ける鬨の聲ふ。ゆく乱ゐ柵の士卒を駈立
駈立找けるゐれども柵の頭人猪嶋郡司将衡ハ千葉自胤の親族ゐ相馬
郡領将常の弟ゐりければ名を惜ゐ訓りを恥て勇まゐ馬ふ鞭打々々士卒を奬し
敵を拉えく。一亦妾時ハ挑戦ふのゐ。荘ゆ是を物ともせぞ堅を摧ぶ鋭を辟く
巷路軍の進退雄々ゐ勇将の下ふ弱卒ゐければ群羊を駈る虎彪の勢ひ當
るふ前ゐりけふ背ふ。ゆ満呂復五郎重時再太郎安西就ゆ共侶ふ揉合して攻る程ふ
猛火頻りふ飛散りて柵の士卒の頭の上ふ落花の像く降蒐れば将衡竟ふ脉難て
捨鞭中て後門より馬を飛し命を脱れ木下川堤を蔓直ふ安木逆井を投て逃
ゐ。ゆ衆兵俱ふ人辭打て其里とも分ぞ乱走ゐ中ふ後れハ烟ふ噎び火ふ焼れ
臥累りて死活を知ぞ或ハ兜を脱ぞ戈を伏せ跪坐ぶ哀を請ふく降参ゐ。ゆ。ヨヌ
りける然れば犬川荘ゆ事の勢ひ已べりぬれば敵の捨ゐる好馬ふ。ゆ。ち跨りて隊兵を

找めく猶も後嶋将衡を生拘んとく逐さうける。話分両頭是より先ハ大田小文吾悌順ハ其隊の兵千百十數名と共ハ幾十艘の戰艦を暴河ハ乗浮めく。妙見嶋の柵を襲ふハ那蘭人を建る艦十艘を先ハ〇て柵の水樓ハ推寄せるハ敵の水中ハ張亘しる大鎖索ハ既ハ満呂再大郎ガ皆斫捨うけれバ這回ハ間近く漕寄れども聊も偉りあらぬ徒而里見の士卒の先艦るハ既ハ柵の溝戸ハ推寄せて岡の聲を發げ征鼓を射先〇空銃を放うけて攻蒐るべ勢ひを示ハ真夜中過ぐる時候わて黒白も分ぬ烏夜ハれバ柵の士卒ハ敵の艦の多少を知べくもあらぬ然バ這妙見嶋の柵の頭人彦別夜又吾數世ハ今寄来ぬる敵の臧れ聲鼓叫びハ吐嗟とぞう驚ぬ噪ぐ士卒と制めく若们るどて先度のゆを思いざ敵ハ今宵も亦我矢丸を取らんとそ蘭人を艦ハ建て空攻をあるのを初ハ我思ひ足らそ那術ハ乗せられうけれども豈二ゝび欺れんや固ねくと窘めて毫も備を做さけの人ハ程ハ大田小文吾ハ妙見嶋の西岸へ隊の諸艦を漕寄せて大銃をう水際る塀をうち破り櫓を毀ち衆兵斉一艦より出さ哨と嘯ぐ三十二ハ稠入る勢ひ破竹のごとく當るべくもあらざりける柵の上卒ハ驚慌て原来今宵の敵ハ那蘭人ハあらざりけの不意を伐れて爭何せん一圓ハを退ぐく五十子とろ来ま民ハ御方を待てそうめれと罵りの俱ハ逃迷へバ彦別夜又吾奴ハ沼堪ぞ逢一兵毎不知案内る敵を然所ハ捉竜て擇殺ハ做さるべ犬まれ豬ハれ首を沼て人找めく。鎗晃めく〜て近つく敵の兵を突仆一毆散〜てうと先途と戰ふ程ハ今井の柵のかさハ猛火起りて敵河水を照〜て白晝のごく敵狄自家ハ羣蜂の叫び漸々ハ〇そ〇ハの柵の士卒ハ我ハ先ハ今井の柵ハ攻落されぬと思ひ〜バのゆく戰ふ擬勢ハく乱れて辟くぞ中路を小文吾ハうと先ハ找て敵を碎ハ擲々數世ハ鎗を打落〜く逃る甲の総角を搔抓き引ぬて三間許投〜バ自家の士卒折累て

是義の勢
傳に部腹
第百七十一
回の下に出
す本文と併見
べし

厭さく索とたゞ引ける柵の頭人今目前に生拘れさりければ況士卒い立足もなく逃くるも舫に執無りく辛く命を免れんとて舫ある岸に来まけるに誰か知るべき豫より大田が計る所あり自家の艦に士卒を遣して落んと欲する敵を乗せざる且敵の艘に措て衆舫に艨艅を奪ふて其舫毎に一箇もあらせざりければ柵の士卒の稠乗る者艨艅なり

夜河の舫の遣端なければ心慌く左せよ右せと罵る程に風烈しく流急ければ憶を舫と海へ吐れて往方も知らざりし者ヨメクロの中に舫に乗ずして陸地に脱れて次の日に寄隊の陣に赴て這敗軍を告し者才に両三名に過ぎず或は又鳥夜に紛まく里見の艦に乗りし者い小文五郎が遣し守らせし士卒の為に生拘られしが残兵僅に百五六十名只得大田に降参して柵立地に表だけり既にして其暁天に大田小文五吾悔順ハ柵の守屋に登時里見に勇士猛卒功ある者第一番に柵の頭人彦別夜又吾に結ぶる素と最も緊

く捉縮て小文五吾と相距ること約莫一丈許ありて大床の下に蹲居しを小文吾相い夜又五吾に向ひ曰ふ我れ數世汝を大石氏の家臣老勇士の稱ある這妙見嶋の柵の頭人と呼ぶ敵に脆くも戰負て阿容々々と虜に為らるる者に勇士と謂れしハ虚名にあらんかと詰れば夜又吾ハ眼を睜りて然ら蓋世の勇士とのへども運盡れば阿容々々と敵の虜に做れる者古より尠くも壁言ぶ源義経の佐藤忠信義仲の樋口兼光及近世の妻鹿孫三郎本間孫四郎の如き枚挙に遑あらんや其他ども及ざる所和郎の主君里見親子い年来仁政の恩あり故に始より人を屠りて地を奪ふ故に境を犯して今井の柵をも火攻にせん當柵までも伐罰るがら反て我を勇るとく詰るハ是什麼ぞと聲苛高く荅るを小文五吾ハ冷笑ひて知ずや這上下の今井ハ古へ女木猿江の民なれども我君里見殿に従ひて近曽扇谷の管

領豪奪をし暴河をりく封疆と唱へ今井河原及這妙見嶋ハ柵を構
へ水陸の通路杜絶ハ及べと我君寛仁大度ハして敢ハ邑の地を爭ハ給ざ仁
君豈虞芮の訟を要して墻ハ鬩んや。あらぬと何ぞ扇谷定正主の反て心陜
く怨むまゝ怨を怨として今番猛可ハ諸侯を連て且水陸二路の大兵ぞそ。
我房總を伐まくもの故ハ我們ハ則當所の防禦使ゝ進て敢人の城邑を
奪畧る者ハあらねとも然たりの備るゝんや。あの故ハ我悌順義兄弟大川莊次
義任と相共ハ防禦の君命を辱して歩く行德ハ屯を做せる雄兵八千駿馬良
船戰粟弓笠鉄火藥ハ至るまで東西皆足らぬとなし。あれども五十子の大
敵千今寄も來ぬ坐して食へば樞も空し。五穀い民の辛苦ハ成る粒々司命の
至寶なるを思いで徒ハ費さば民の父母なるかひやいあるあの故ハ今ハ我君里見殿の
封内なる這河の西岸ハ陣を徙して大敵を待まく欲をもとして今井妙見嶋の
二柵を共又除ざるとなしぬ敢我とりもを出して人の柵を拔人の地を掠め便よ
とまるハあらぬ我有ハ所の地をとり復して便りよくせんと思ハのミ汝ら倘這義を知
らば早く兩柵を退たく我ハもの地を返さべハ推寄ゝらば五十子の大兵を負むの
故ハ竟ハ自滅を取りあハあらぬや。恁ても我君不仁して人の地を奪ふとハ後咱
ら防禦使であるゝらば大敵を待ぎて境を出踰し我とりあらけて墨堤を
做さと思ハ違ん。いハぬやくと質を詞の理義當然ハ夜又吾數世ハ言寄ゝて頭を
低て默然ゝ小文五呂呵々とうちゑひく數世ハ向ハて又ハゆ汝みづから匹夫の勇を
忠信兼光ハ比べて云云とのゝハ過ぎるゝ。あれども大石憲重憲儀の家臣ゝる者皆
仁田山晋五等の類をゝんと思ひ。ハ汝小勇あれば。臭ハ今虜ハ対ゝ敢屈せ
ぬ非理の理をして我ハ對ひて爭ひハ死を怕れざる者ゝ似ゝり遽莫我里見殿ハ仁義の
君ゝ殘ハ克殺を主とのハ御本意ハ違ひまゝて汝ら皆憎しとて首を刎ぐ何ハ

せんに兵具を剥とりて艦に乗せ海へ流し波のまに〳〵死活を儘其偏幸にまかせて恙なく其船柴濱へ漂ひ就くべき主の大石親子又はけらえ両管領へも隠せとるべきの言の條々を明き地に申え上よ然ども放免の識なくば其非を飾ることもわらん兵毎の生口なら者の頭髪を漏さず前刀捨よ其の餘の事は箇様〳〵と見うへ〳〵く吟味れば大家都てあらるる果て彦別數世を首なく生口の柵兵百五六十名の髪を剪り衣一領に寸銭ども身を帯ることを饒さず船に戰飯塩將酒柴薪さへ採穿れる者五六艘船毎に放免の生口を送りなく相載く妙見嶋の東の岸より大洋へ推流す勁風急流而をら一雲時も其船を漂せず勢ひ宛射箭の如く往方へ知らずけり既にして天の明るを大田小文五吾悌順は隊の士卒三百名を分ちその処の柵を守らせ自餘の軍兵を従へて艦を今井の岸に渡して荘内を伐捕る河原に柵を造る程に辰の半に成りけるその日は十二月五日なり那五十子の城に聚合る敵の諸將

顕定成氏憲房朝良自滝ちは俱に那城を縋て去る水陸より這行德口と國府臺へ推寄せて一時に守を伐破らんとて連りに路次にいそぐと云其隊配進退の第百五十九回に見えたるごとく既に是同日の夕暮れども其の時五十子の寄隊の大將上杉五郎九朝良千葉小自滝大石石見守憲重原播磨守滝久相馬郡領將常稲戸津衛由元等は路近くに在れば今井と妙見嶋の両柵を破ることなく敵に便宜あらせるば戰ひ難義に及ぶとも人を微妙くも計りに支戰との勝敗は地の理に据るの遅速に在り五十子の寄隊數萬騎なれども輒く泉川を打渡して勝を取ることかなうべしと智ある人は評けり

間話休題小程に大川莊小義任は逃る後嶋將衡と生拘にして滿呂復五郎再太郎安西就小等は先を打て従ふ兵一千五百を駐立々々赴らけるに下今井より木下川頭は処々に枝流あり去向に耳りヨマくれども逃る者は路を擇ま

莊介對陣
射く旌
の緒を斷つ

赶ふ者ハ人馬の脚を損ハしとて川ふ落ち樹を伐せて投架しるどせ一程ふ思ふ
あも似ぞ時移りて猿江の荘まで赶つて来れば既ふ亭午ふなりけり。あの時後嶋
将衡と其隊の残兵も逃脚早く迫ふ延く。あるぞなりしとこれば又前面より忽
馬として出来る。雄々あた一隊の軍兵あり。其勢約一千五六百。夥々とーく隊伍を
乱さず其隊の長と見えるる一将鎧の紙緒華やかるねど馬上優ふ足樫を操せて
間近くなる隨ふ今敵と見て慌ぎ噪ぐ備と早く魚鱗ふ構て敵推甚ら伐破
らんと弓を銃を先ふ立せく。悄然として音もせぞ荘人遥ふ目足を見て是必五十
子より来る先鋒の一将なんと思ひて馬を找めく近つく隨ふある旗を瞻仰るふ。
一雙矢筈の花號ある下ふ北越庁貝一大女丈夫般大刀自代軍稲戸津衛田充
とふ二十一字と大畧者ふれば荘人憶ぎ人含咲るぐる。士卒と制めく馬を找る右ふ
満呂重時安西景重あり左ふ満呂信重あり。間を距ること遠くぞ荘人程ふく

馬を駐めく。みづから聲高ふ喚る曰。其里る一陣の隊長を稲戸主と知るるハ。
旗ふ寫されー文字を問でも既ふ紛れ。怪ぶ我ハ里見の防御使犬川荘人義任是
る。稲戸主ふ對面して。いまく不ーれとてあれ姑且前九を飛ぎべくふ敢請ふ陣頭ふ
出ぬとて喚りける。登時寄隊の弓を銃み左右へ颯と辟く処聊旗を靡せて見
れば稲戸田充馬を徐々と歩せる。右ふ荘狄井三郎あり左ふ妻有復六あり。登時稲
戸田充ハ馬を陣頭ふ乗居て仁と荘人ふうちち向ひて一別以来犬川王志もあるぐいと
芽出ぎ。和殿今ハ里見の君ふ仕へくあの地の軍陣ふ防御使とり。と変えれ反く封
疆をうち踰く入冠あるハ甚麻公ぞと詰るを荘人うちぬ。鞍の前輪ふ額伏
御て恩人安泰教ふべ。相別ぎより天の一方。栄辱時あり恩仇差あり量義ふ愛顧を
稟ーより我義任不似ーて里見殿ふ仕る爰で思ふれずとのみをなく。義兄弟大田小文吾
悌順ぞと相共ふ今番當所の防御使を辱うせり。小ろふ這女木猿江はくの

諸邑ハ里見ホ新附の領所ニ候ハ敢漫ホ境を越く更ホ敵地ホ入るホあらぶ今試ホ其非を論せバ扇谷殿初より連帥の貴重ととの叨ハ今井河を而藩の封疆と唱て柵を今井と妙見嶋ホ構へハいふ故ホ我義任大田悔順と二隊をもて昨夜那二柵をうち破りて逃るを遂ひつゝあの地方ハ来るハ則我職分也。恁ても領所ホ敵を待つのを敢境を犯ホあらぶ既ホて今憶ども敵の先鋒ホ相逢ハ勝負を一時ホ決せんあの我職分勿論ニ候ハ義ホ義任浮浪ゝ一時大田小文吾と俱ホ必死窮地ホ遇ひ恩人知己の好情ホよりて情地ホ免るゝを得ん恁而相別るゝホ及ひて義任則恩人ホ誓ふく我身倘幸ハホ未生以前の宿因をのそ異日里見殿ホ仕ち且當家と兵を構るとありて倘恩人と對陣せバ一会を避て洪恩を篤義ホ答ふゝんとハ一ホ料ぎも今あの地方を其拙言を果さホ至るハ二てび幼くこれ孤ひ文吾妙見嶋を敵を伐拂んを昨夜那柵ホ向ひ今あの陣ホ在りざれども他も亦大人の舊恩ホ答ふく欲ゝ志ハ我と同じ。恁ハいへども今日のゆハ是我君の命令人情をのゝく私議ハ公道人情西ゝ。虧を盈ざる術をそれいでくとハ背ホ自ふる上刺の征旗一條を掖含て鏃をそ抜垂ゝ弓とる直ゝ其弦を刺ふて。満月の像く弯固め稲戸津衛の後ホ建る旗を注く礫と射る矢局差ハを旗の緒を弦弟と射断りゝ旗ハ天さゆふ射上されて一反の横雲風ホ別れて峯上の松ホ懸るごとく。一要時閃くと見る程ホ後陣のゝふ隊ゝ敵も自家も聲を合ゝて射るゝと誓言散動ゆゝく亟ホ鳴りも已さりけり登時荘介ハ挾ゝ又由元ふゝ回ひく稲戸主豆まを人再會ハ異日の便宜ホ任せんのゝ然ハく。とだゝりホ馬の轡を兼旋りて今井を投て退けバ満呂重時殿ハ衆兵齊々整正々と係ホ前後ホ従ひけり。これを目送る寄隊の士卒ハ皆忙然ゝる开ゞ中ホ妻有復六怵難て由元ホ薦る那大川荘介ゞ奸雄る言を設け射藝を示ゝて戰を

を退くに勝くに勝ぬと知れば人今赴墓く伐ぎもあべ後難免れぐ所べ。とへば由元頭を掉く不ら々他ハ其盗世の義士えみづから義任と唱做せる名ハ恥ざるべ。進止を見て思ひ心術武藝我敵ふハ過ぎる然ば他ハ義ハ仗く二舎を避け我ハ義ハ背ぐ是を赴ぐ縦戰克とも武士の數ハ入らるべ。我意ハ左傳ハ晋文公三舎を避る事あり。二舎ハ幾里ぞと知らぬ因て今按ずるハ唐山の里法ハ十里ハ一亭。五里ハ一舎といふ。那土の一里ハ則是我皇國の六町有奇ぞ。此も所云坂東道是人是ハ由て此を観れば一舎ハ則三十町。二舎ハ當ハ九十町ぞ。或ハ又十里ハ一亭。二里ハ一舎とへ。あくまで只その大槩。敢里數ハ泥ひべ。那荘伏ぞ其才文武ハ富ら。義を知て退くハ柳亦君子ぞ。里見ハかくの如く智勇忠義の大士八名あり。両管領家ヨヌ執ぐ。戰を一。勝負を知るべ。俺ハ我老夫人の軍代ぞ只得這回管領家の催促ハ従ひ者人然るを勝くと知らぐ。戰ふく我士卒とヨヌく喪ふとあべ反く是不忠之世の鄙語ハ云笠貴子下ぞる力甚塾とのふぐも少るべ。權且病病ハ推けく安危を見るハ考くとぞ。と呟きて嗟嘆して隨即荻井三郎ぞ雜兵四五名を従せて。その地へ寄隊の總大將上杉五郎九朝良の後見ぞる大石石見守憲重の陣へ遣して告るぞ。由元近年ヨ病ぞ。ハ暁の風寒ハ冒されて故狹猛可ハ持病の疝積発りて騎馬の掉ハ做りかたく姑且後陣ハ退ぐて將息をせまく欲も先鋒を免除ぞ。と辭ぞ。躰て隊兵を故のごとハ従へて両囲河の方ハ退ぐ。所ぞ両囲河ハ着陣ぞ。是より東ハ入江の枝川ヨヌくぞ。且枯蘆さ敏かれば兵を用る地方ハ。と大石憲重ぞ計ハ亨ぞ。その日則人馬を找ぞ。五本松の曠野を本陣とぞ。又陸路とぞ。自家の士卒ハ原胤久相馬將常ハ従て両囲河ぞハ船橋とぞ渡して俱ハ五本松ぞ本陣ハ着到ぞ。中ハ先鋒の頭人稲口由元

一隊ハ敵の在る所を極んとそ猿江の方ヘ造ると云其事ハ上ヘとゝ〻る如し。その外路次ゆく馳加りける幾隊の野武士さヘまゐれば摠軍二萬五千餘騎件の曠野ヘ陣屋を連ね。某局の像く構へる勢ひかのごとくなれども既ヘ先鋒の頭人なる稲戸津衛由充ハ時病發りぬとそ辭ふく猿江より引ハへくるゝと雖ども他の一隊ハ五本松ヘ造らゞ。人皆是を訝く思ふヘ又今井妙見嶋二柵の頭人小越小權太表練援嶋郡司將衡彦別夜叉吾數世ゞハ昨夜里見の防御使犬川莊介大田小文吾ヘ柵を火攻せられ且表練ハ敵ヘ敵られて命を殞し。將衡ハ辛く脱れて其殘兵と共に偽ヘ逃く當陣ヘ來て敗軍の想ヘ又妙見嶋より數世ゞ隊兵両三名才ヘ免れて來ゆるあり是よりて彦別夜叉吾ゞ敗軍に為体他ハ數世を首ゆく三ヘく敵ヘ生擒れ剃頭髮を剪捨れ虚舟ヘ載られて大洋ヘ推流されゆくまでもその時ヘ具ヘ咎え或又莊介小文吾ゞ猿江逆井まで里見の所領へと云那說さへ告ゆる朝良自亂怒ヘ堪ず疾

將衡を牽出して首を刎て敗軍の罪を士卒ヘ示さゞハ遂ヘ自家の弱きヘ倣ら疾々せよとゝそ世ゞ將衡ハ駭怕れて戰ゑ兄將常ゆゑ向ひて陳ずるまゝ小臣ゞ敗軍不覺の罪ハ今ゆゑ償ヘ由ゆけれども敵ハ一萬のまゝ勢ゆ臣ゞ隊兵千五百ヘ過ざ妙見嶋ハ士卒五百名のみ寡ゆそいふ。て衆ヘ勝ゆ倘一日夙く御勢ゆ當所ヘよせさせぬひるゞ臣ゞ敗軍あらんヘ後悔是非の及ぶゝヘ願ふハ權且首を假て今宵逞兵四五百を授けさせゆ敵の陣所ヘ夜襲して那大両箇の首を捕て先度の恥を雪むべ。但し自家ヘ野心内應の者ゆゝゞ計策漏易ゆ。就て疑ふゝゝハ別人なるゞ北越片見殿の軍代なる稲戸津衛由充是のみ他ハ先鋒を奉りそ鄙ヘ猿江ヘ造り。時敵の隊長犬川莊介ヘ撞見ゆ以前を射出さゞ戈を交ゝ其退くと目送りそ那身ハ反く急病ヘ推りそ辭ゝ稟して當御陣ヘも參らざる其内心量りかさる故ヘ忠告仕りぬ。その義をもそ因免の執成をそ願ひけれと良を請れ

将常は有敷ふ胞兄弟の急難同憂の切るゞ為ふ上坐ふ侍のる両家老輩大石憲重原亂久ふたの義を告て愚弟将衡ゞ死刑を宥め。今宵の夜伐を饒ふゆゞ臣ゆも他と共侶ふ敵の屯ふ推寄て。荘介小文吾隊の兵毎ゆ。飯ふせまく欲ゆ。いろでくと庶幾ふを憲重亂久ちゆ。ゆの義寔ふ由あれば。そ俱ふ遽しく找を出く。両主君朝良自亂を諫るゆ。将衡ゆも敗軍の罪饒されゆ。似くれへども敵ハ一萬自家ハ小勢敵しゆゆ。故るゆふゆゆ。然れば将衡並ふ将常ゞ願のまふく敵のゆふ夜伐さそ。其功わゆ前罪を償ふ足るゆべ。いまゞ敵一人ゞも敷ゆ捕らゞ。自家の隊長を誅しゆゞ恩怨早く地を易てゆゞ敵ふ笑るべ。賢慮を仰ゞまると。詞弁しく執成ゆ。朝良自亂うち咤て。黙然うゆと半晌許ゆゆふ。人朝良ハ憲重ふうち向ひく。猿嶋将衡ハ千葉の家臣ゆれば。我ゞ左右ゆゆふあらゞゆ。ゆくふ稲戸由充の逆意の告訴ゆ。ゆふわらゞゆ。他ハ我ゞ外祖母。服大刀自の軍代ゆれゆ野心ゆるゆふわらねど。景春既ふ和順ゆゆゆら。今ふ至て来會せゆゆ。ゆの義心許ゆ。とゆれて憲重然ゆ那由充ゞ敵ふ逢ゆゆら。戰ゆゆ。為体ハ方僅援嶋将衡ゞ告ゆゆ。然ゆとて其事の虚実分明ゆらゞゆふ自家の隊長を疑ハゆゞ二萬の士卒鬼胎と抱ゆて。よく戰ふ者わらゆゆゆ。非如由充逆意ありとも。他ハ僅ふ一千餘の北兵の長くるのゆ。何事ゆゆゆ。姑且度外ふ措ゆゆ。悄ゆふ論ゆれば亂ゆゆ。亦其主自亂ゆ。和解ゆく。将衡ゆ救ひゆゆゆ。其兄相馬将常と共侶ふ。夜伐の願ひゆ許容あり。則逆兵一千ゆ。擬けく敵を襲ゆけり。

第百六十二回

荘介伏を設く夜将衡を擒ふ　小文吾勇を奮ふく就鳥熊を撃ふ

介程ふ犬川荘介ハ其隊の士卒ゆ従へ。今井の柵ふかゆ。ゆふけるふ既ゆて大田小文吾ハ妙見嶋ゆる隊兵を渡ゆて。夙く這里ふ俟て居り。這柵の燬ゆゆ見れ原守

屋を修理せるに敵の脱棄したる甲冑器械などのまゝ死にたる倉廩を燬の後ら所りける戰来さへ故の隨るを枚挙るに迫あるぞ登時荘介小文吾に告るに昨夕あの柵を攻落しける事の趣且逃る將卿を追蒐て憶ぞ猿江に造りし時五十ヲマより来る先鋒の頭人稲戸津衛由充に撞見るに那舊恩を謝せべ死為に竟に先言を果しける事恁々と説示せば小文五吾は顧感嘆して我も亦那人に稟くる再生の恩あるに尚一言の謝義に由るに況や今は刃を交る怨敵に折も よく和殿那義を果しめ給へ寔に是義を憐むべし却て咱等は妙見嶋を攻破て柵の頭人彦別夜叉五吾數世等を生拘りしかと我君の御本意に違て殺せば要なしと思ひ給へれば命を饒て生拘約百五六十名の頭髪を剪捨て各ち筋ふ棄のまに数日の飯米柴薪さへ取せて海へ流しぬと告るを荘介はくと叫び深く感服あて席を譲りて却りぬ我ら這柵を拔けるも和殿が妙見嶋を伐捕りしも其軍

功に相似たれども我隊兵を滿呂再太郎が這柵の頭人なる小越小權太表綱を殺捕て首を斬まく敵を殺しなれば和殿は妙見嶋を一個の敵ども殺戮せば只の兵頭髪を剪捨て流し遣はしは仁者の術を是則諸の御本意に稱ふ所我ら及べ及ばふあらじ刈又我は漫に敵を赦て寄隊の大兵の来るべきを思ひ那時我倘寄隊に逢ばまく士卒を失べし祫と云巧拙已に分明なり今日よりして當所の防御使の上座を和殿に譲る我は則副將なるに小文五吾は犬川其説は義引ぐ丈兵を山野なるに戰場に溢む者誰か敵を殺さぬ者と勝を取ることあらんや故に館の御軍令に敵を生拘ることを第一とせん數を補ふ又其次と做べしとこれあるを殺せば罪と云ふまじ然るにあらんや這里と妙見嶋に敵へいまゞ寄隊の大軍と戰ぎして何ぞ軍功の甲乙を論ぜべ其斟酌は要なしと詞を殿して推辭ども荘介聞ぎ頭を掉て昔陸奥の戰ひに義家朝臣に目

家の士卒に剛臆の席と分ち剛なる者を推登し後れ者を退けて励ましめ給ひ例ある這と那と共同しくるねど我が館の御本意に違ひを貶さらんや且唐山唐虞三代の制度なるに天子の諸侯を罪なる征と云ひ諸侯の諸侯を伐つを伐と云ふなり天子は征して敢伐せず征は正しく身を正くして人を正くす又伐は罰して其罪あるを誅するを罰と云ふ何ぞ戰ひを事とせんや然ば館の御軍今へこの義に縁らずのみ宋襄信人の仁に異ならず和訓は征も伐も倶に是なるべの義として諸侯の諸侯を伐つをも征伐と云ふ者ヨマるる定正主の檄文に天誅と云ふ儆れること開ハ左もあれ右もあれ昨今あの隊の戰ひの優劣に自賞自罰の正しきを必士卒に示さんとの義異日我必洲崎の御陣へ稟し上へ枉く愚意に任せ給へと叮嚀に怠状あり則小文吾を敬ひて上坐に推薦め其身は次席に就きしが是を見て為ら守もあるる滿呂復五郎再太郎安西就れも皆ゆゝしき士卒皆感服をして莊れば心正しく今この自罰の計ひを為ずして

なりしが這柵の灯門に寄て夙く炊沢果して隊兵都て飯を為て饑を啖ふ程に行德に在陣する登桐山八郎良千八豆義に千世赤孝道の麾下として路次に住められる加勢の御民の頭人館持傳扶朝經大樟村主俊故が隊兵さへ皆引牽て人馬送る渡し多し隨即大川大田両將に出る事の這今井妙見嶋の両柵を攻捕の事の由を今朝しも大田主に云ふ其内えあり下則塩濱なる陣所とうち立て人馬を這里へ渡さまく為る折両股原木の間に在陣する這個館持大樟両頭人に往日間諜兒をして下總なる千世赤氏の虚実を探らせしに孝亂主六両參頭の催促に従へども狐疑して加勢の軍兵を出さざるに其封疆を守ると云ふの故に大樟館持も那里に要を設けて各其隊兵を招き俱に塩濱に来ふ

ければ相伴ひ給へと云ふ二大士うち連て亦便宜の為人かに已に行德

きべ。自家地人館持大樟二隊の兵も又用る所あらん。和殿の計ひ極めて好昨夜の久おの甲ひ箇樣々々。恁々の策とて。莊介小文吾の慈善の計ひを告知れば小文吾亦莊介再談及ぶ程は恩人由充の一隊に逢ひ折ふ金吾を避て舊恩に答へ事の趣と敢自那非と誅て防禦使の上席を讓りける。心操さへ恁々と迭代に說示せば良千朝經後故も共に感ずると大くこそ猶且餘談及ぶ程に冬の日既に暮て燭時候ふるふけの折ふ今井河の瀨に集る水鳥の猛可き物に駭く如く發と立つ羽響して東を投て翔りて莊介遥に瞻仰く小文吾に曰ふ。大田和殿の心屬に今故もなく群鳥の驚立て東へ去りしを敵の今宵我陣へ夜襲を免れ難しんとの事を小文吾に問て推量宜ふ其理あり初の柵の頭人も小越小權大に果敢く襲れ猴島郡司將衡に辛く命を免れて寄隊の陣へかりけ然るに恥を雪んとも今宵又來て虎の髯を拔まく欲ふ

ものもあるべし。先に備を做きべくれとふ故に即登桐山に良千と館持朝經大樟後故に事恁々と咽示ふ和殿に今宵陣頭に埋伏して敵推寄來ば生擒りぬとの事良千朝經も後故も悅び羨て退出て准備とぞ為ける。小程は猴島郡司將衡に其兄相馬郡領將常と相共に一千餘騎を二隊に分ちて人に枚を銜ませ馬に鑣子を破てその夜子二の比及ぶ今井河原の柵に推寄せる將衡に逞兵五百名を率て先に找を將常も亦五六百の兵を從へて陸續として後陣に在り恁而猴島將衡に既に找を近就て敵の虛實を覘ふ柵の門戶に半分燒て出入に便よければ直々と馬を找めて士卒齊一綱入に柵内殊に蕭然に敵一人もあらざりければ將衡訝り疑ひて原來敵に備の兵毎早く退出よと喚る聲も果ぬ間に忽焉として左右に樹林の蔭より暗弼とおびゝく敵の發つ鍊砲の樓と響く程に喊と鬨る喊の聲と俱に陣

鼓の音置く左の方より館持朝経又右の方より大樟俊故各五百の隊兵を
找めく左右齊一揉合へ〻慌忙噪ぐ寄隊の士卒と瞬息間に突山崩せば誰ら
一柱一泡べに将衡も徑に馬を返して外面投て逃出れば後陣に續て相馬将常
入替り敵を柱ゑて馬を跳せ鎗を拈く近つく敵を突伏々々士卒を駈て挑戦に勢力
ひ悍くこざるふあらざれい将衡も稍立直して又相貪けて柱えて背後に起る敵の伏
兵是則別人なるぞ登桐山八良千と又是五百の雄兵なりそ透間もあらせず攻伐
程に寄隊の前後三方の敵に當るよ逞く乱れて走る开ゲ中に将衡も退れ後れ
良千と鎗と合へてあくを先途と戰ひ〻良千も武藝勝れ将衡が尖頭乱
れる鎗と意哩と反落して怯むを左右に引着く馬上に是を生拘りけり一将擒に
〻其隊兵或い逃去り或い又降参して馬前の塵を拂ふもヨマ〻有徒らに
程に相馬郡領将常い辛く一方を殺脱て從ふ隊兵百名許と共に五本松を

投て走り〻ふ惆然とあそ馬を駐めて左右に立る隊兵を見ふ〻ふ我憐ふ第
将衡を帮助んとそ漫に夜戰を做損じて将衡い敵に生拘れ我も亦隊兵を
ヨヌく敵せ〻ふ至れり因て意ふ我、主将千葉殿に只管血氣の勇に誇りて敢
始終の勝を思ふ〻とそ御高い将衡が敗軍を甚く怨讟て首を刎よと下
知せられ〻を我ら尽くふ殺ひ又總大将扇谷の朝良主い尚是乳臭の少年な
れば俱に血氣に惴るの〻敢老黨を敬ふ〻ふ我今あの為体を〻阿容々と
あそ五本松に帰ふ本陣に参ら〻必又那怒りに逢ふく可惜首を刎らるべ〻武
士なる者い敵の為に命を捨てそ後世まで名を貽さる自家の為に形を縛
首を斬られ〻世の胡虜に笑ふ〻ふ去向の吉凶を思ふ〻ふ愚〻かな主と知り〻
五本松に還るい危〻我い悄地に本國千葉に赴て孝道主に身を寓まく欲を
決達我に從ふく共侶に千葉へ帰ん若又欲まるよ〻あらば速に立去れ我決

文溪堂藏

あて怨るーとのふを大家うち守て我们いあの年本御恩の下ふれひーゐ今ゑの時ふらろふ
ゐく君と共すて已が志を那里ゆう身を躯也ゑ死只投き方へ召れゆ皆御伴ゑそ願ー
けれと異口同様ふ答ーゐべ將常欺び領ゑく然ーゐのそけと路引違へて形貌ゑ窶ーろ
間道より主僕倶ふ千葉ふあゑく孝盜ふ降参ゑけり相馬ハ千葉の親族ゑれども
將常弟兄故ありて年來石濱の千葉ふ從ひゐ今の難義をもう力ゑふ將常
竟ふ其隊兵を率ゐく身を孝盜ふ寓せーゐ孝盜欺びて是を疑ゑ則本領を
還ー與へく家老の列ふを侍らせけるゑ是後の話ハ今程ふ今井河原ゑる里見の
柵ふハ登桐山八郎良干舘持傅杖朝經大樟村主俊故ゆゑ大川大田の軍
配ふ從ふく其夜より寄隊の頭人獲嶋將衡を首ゆて生口及降参ゑ兵無
皆數珠係ゐく倶ふ柵の正廳の檐廊の下ふ牽ゆく集ゑく大田大川両將實撿
ふを今れゆける登時大田小文五呂悌順大川莊次義任ハ満呂安西ゆの諸士を從

へく廳の上坐ふ在ゆ先其生兵交名を閲ゆる夜半の頭人獲嶋郡司將衡ゑ
登桐山八郎是を生拘ゆ又將衡の從母弟比田鳴子八村八角を舘持傅杖の隊ふ
擒ふ也又相馬郡領將常の家臣と守ゑて渋谷柿八郎足脱を大樟村主ゑ生拘
けゆ軍功孰も紛れあゐ也當下犬川莊次義高く燈燭を抗さゆく佐と將衡を相ぐ
ゐゆ獲嶋郡司衡ふ和郎逃歩早く何の程ゆ見えぬゆふ今宵又来て
命を餽ゐハ宛是夏の虫ゑ燈火化ふ入るふ似ゐ去れども我君里見殿ハ仁義を
旨とゑゆ我们も亦其軍令を守りて戰ひ勝とも敢殺戮を恣ふ也ゆ縦今和
郎ゆ皆悉誅ゆるとも寄隊の弱ゑふ降ゆもあらーと云へば小文五呂ふ亦ゆ我
昨夜妙見嶋の柵を拔ひ時柵の頭人彦別夜叉五吾と其隊兵ゆ檐ふ也ーを
船ふ乗せく流ー遣りける例も有れば海ゆも還らんと願つ皆放ち遣ゆ文五直ー
勝負を決せよ兵毎其降人と生口の索を皆解捨よと云下知ふ從ふ縄合の

雜兵等ハ。阿と答へ。随即将衡足脱村簡等に被たる索を解しかバ。将衡又
且羞く頭を掻て。あなかしこ二犬士に向ひて。われら在下等不肖にして量らず。
先度の恥を雪んとて身ハ今禁足囚に做れしを。猶再生の慈恩に逢へる歟。何事歟
是に優るべき。然れども我主将自滑朝良ハ。みづから血氣の勇を負みて。敗軍士卒を
饒さず。郷の在下戰利あらざれバ。その柵を喪ひし時自滑怒甚しく。既に死刑に處せ
られしを。我兄相馬将常が要く救ひ給ひぬ。則倶に今日の夜撃を命せられたり。
今宵も亦戰ひ負く僥に命を免れしも。故の陣所へ還りなバ。自滑なでふ饒べき。又一
層の怒を増さく首を刎られけむ。闇を去て明に就かば。天日を見るに由なく。不賢
失く賢に得ぬるハ。管仲百里奚が甘まる所なるべし。願ふハ今より御なに屬して。再
生の因恩に報んための義を許容あれかしと。亦他事もなく答まうす。比田鳴子介村簡も。
亦是猴嶋の外戚なれバ。情願将衡に異ることを留められんことを欲すと云。獨渋谷柿

八郎足脱ハ主ゆゑに。將常に叛きて二張の弓を引べきものならバ。放ち遣させ給ひ
なバ安危を将常と倶にせんとの義を願ひまつるといふ。荘介是をうち聞て。犬田の意
見什麼と問へバ。小文吾答て。然バとよ既に皆助命の上ハ。留らんと願ふ者ハ留めて
是を用ふべし。かへり去んと請ふ者ハ放ち遣るもよからんぞと。いふを良干欽べ二犬士を諫
めて。両君仁慈の計ひハ。則舘の御本意なるに。愚意を舒んハ憚りあれども。
人の心術ハ測りがたし。今将衡等の命を饒して愁に用ひなバ。黄ハ虎に翻る
悔なしともいふべからず。況や還らんと願ふなる足脱等を放ち遣りなバ。寄隊に我備の虚
実を知られん。然る時ハ是も亦寇家に刃を借し飯を齎るに似たり。是千慮の一失
歟。猶再思と。とて願しければ。とぶに荘介うち笑て。登桐和殿の小心ハ宜なるに似
ねども。都て将たる者の巧拙ハ。両人局に相對ひて。象棋の勝負を争ふに異なら
ず。其高名なる者ハ。よく其敵手の馬を取て已が有として使ひぬれバ。則是敵

のく敵を攻る段ゆ。又其拙き者ハ偶敵の馬を汐て用る所を知ざれば握殺して。竟ゆ要ゆ。意ゆ今寄隊の両大将自瀧も朝良も。士卒を用ゆ拙き者と将働と足脱ゆを用捨のみも。這理ゆよりて克思ひ。必疑ひ給べし。と諭せば良千感服して。又ふたゝび小文五吾差ゆ慰めそ。則援嶋将働と。比田鳴子介村禽とハ其従兵一百餘名と相共ゆ良千の隊ゆ属て。則先鋒の小頭人とも。又渋谷柿八郎足脱とハ。願ゆのまゆく五本松る。寄隊の陣へ遣ゆ。是ゆよりて。寄隊ハ二萬五千餘騎朝良自瀧両大将ゆ。昨日五本松ゆ着陣の事の趣ゆ。詳ゆ告えけり。左右ゆ程ゆ天の明ゆ。犬田小文五吾大川荘介ゆの日の戰ひの隊配を定ゆ。満呂復五郎立里時ゆ。ゆ寄隊の両大将朝良自瀧ゆ。少ければ思慮足らぬ。倶ゆ血氣ゆ惴るとハ。将常将働ゆ敗軍と怒りそ。必推寄ゆ来べし。ゆの美什麼と真實立く問へば荘介點頭て。我も如右思ゆ。遊莫ゆの邊ハ枯蘆処々ゆ敵ゆ立て。人馬の進退ゆ妙ゆ。先ゆ今ゆ諸隊と我そ。五本松の這方ゆ。曠野ゆ出て敵と俟んとゆ。小文五吾もゆの議を好として。隨即登桐山八郎良千と先鋒ゆ。援嶋郡司将働と。比田鳴子介村禽を左右の羽翼とし。又満呂復五郎重時を後陣の頭人ゆ。小文五吾荘介。満呂再太郎信重安西就介京重ゆの諸勇士を従へ。陣の中央ゆ在り。其勢約莫六千餘騎人ゆ。飽ゆ戰飯と喫せ馬ゆ。ゆ草と飼そ。徐ゆ士卒と繰出て今井河原る柵の虜を館待。儀杖朝経と大樟村主俊故ゆ其隊の兵千百十數名と従て。權且ゆ留ゆ置け。有徒り程ゆ。寄隊の陣ゆ其曉天ゆ。渋谷柿八郎足脱。並ゆ将常ゆ隊兵の主将の逐電とのまゆ知そ。逃くゆ人ゆ来ゆるも勘くゆ。又自瀧の士卒の。昨夜将働の隊ゆ隷ら。并ゆ中ゆ将働ゆ従りて。かゝゆ来ゆるもゆ。ゆれゆ都て是ゆ。ゆ思そ。昨夜将常将働ゆ。敗軍の事の顛末将働ハ。敵ゆ生拘れて。隊の兵と倶ゆ皆二犬士ゆ降参

なる又文将常に辛く囲を殺脱けしかバ。いまだ當御陣にかへり参らざるハ敗軍の罪を
怕れし。遂電なしつるならんといふ。朝良自胤是を聞て且驚き且又怒る事大かたならず。かゝる
ん。是ハ渋谷柿八等其残兵も敵に降りて反て咱等を害せんとぞ。敵の與に刺客に做なる
かへり来ざるにぞあらむずらん。一個も遺さず首を刎よと云。自胤ハ朝良に思ひつるべしを且
羞さく勢ひ燃る火の如し。朝良も亦その疑ひあれバ倶に競きべくもあらねバ。と原播磨
介胤久が詞を盡し是を諫めて兄脱と残兵等の命を宥めさせしかども。自胤朝良ハ
猶疑ひ解ずして皆陣中に囚置せて厳にこれを守らせけり。然れども朝良自胤ハ
怒り尚理らず。従に今井へ推寄て。残賊将衡村會ハいふもさらなり悪二犬们を鏖にして。
夙く上総に攻入らず大軍功必二の町に在らん。然るを一日も怠てあるべからず熱腸を遣る
かゝりとて両将夙く軍議を定めて。則人馬を推出さんに自胤みづから先陣たり。當
時山東ゆく野武士の剛人と呼える。上水和四郎東三赤熊如牛太猛勢を先

鋒の頭人として嵐剛四郎浅羽麻二を左右の副とし原胤久等是に從ふ。次る
則總大將朝良ハ朝良その日の打扮ハ小櫻縅の鎧錦綉の戰袍に龍頭打
たる五枚兜を戴き黄金造の大刀に虎皮の尻鞘罩て桃花の三歳駒に真紅の
厚總曳せたるに貝錦の四下も赫奕可なる鞍措ならちに跨て征箭二十四插たる矢
箙を鞔做り左右に重藤の弓を握持て徐に馬を歩せける左右に從ふ近臣勇士
松山小利作入間尉藏建柴破麻鬼介麻生一郎等皆甚美麗に擐甲ふたるを枚挙
るに遑あらず大石憲重後陣たり總軍約莫二萬五千餘騎山東に虎を搏にも
べく水中に龍を屠るに足る勢ひあるに振然たり既にして朝良自胤ハ出くといまだ幾る
らぬ先に一二騎の斥候を遣して敵の形勢を張るに其斥候の騎馬馳ちへし敵も
亦今井より推出て既に這野盡処に在り相距ること遠からぬ計るに其勢五六千
を過ざりけりと告るを自胤うち嘲く後陣に怠と告させて前後齊一整々と皆直

急なる推隨ふ戻く敵陣ふ相薩むふ果ーて里見の防御使ハ前後二備ゑ大田小文五吾悌順先陣ゑ。又大川莊介義任ハ其後陣ゑ將とーて寄隊ゑ待ゑべー。低而東西相逼る程ふ迭ふ陣鼓を鳴ゑ〳〵。士卒ゑ找めて箭を射出ーゑ飛て桃弓ふと半晌許寄隊ゑも里見方ゑも各矢傷ゑ負ふ兵あれとも。ゑまゑ一人援出ゑく。ゑ鎗ゑ入ゑハゑ。其時寄隊の陣ゑ〳〵ーて身長五尺八九寸ゑる。両個の大漢倶ふ烏革絨の鎧一對ゑる巨刀の鎗ゑ腋挾ゑ。馬ふ無ゑ。仰張出ゑく。敵ふ向ひて吸ゑ。陰ふ人々迭ふ一霎時矢丸ゑる飛ーて是ハ千葉殿の御内ふて。數度の戰ふ後れを取ゑ。然ゑ者ゑと知られゑる。ゑ嵐剛四郎高成淺羽麻三原弘ゑ。豫ゑ世の人ふ重見の犬士と吸れゑる。小文五吾ハ那里ふ在ゑ。莊介も疾出て倶ふ勝負ゑ決せよと。両聲立ゑく指招けば。登桐山八少ゑ。ゑ憎紀那奴们ゑ廣言哉腮引裂紀ゑんぞと。馬ふ拍れ出んとゑる。援嶋將衡推林ゑ。在下ゑ今這先鋒ふ從ハゑ。ゑ一人

功ゑ。ゑ嵐淺羽ゑ本事ハ知ゑ咱ゑふ任ーゑ。と請ひゑ比田村禽ふ目を注ー。騎相並ゑ馬上ゑ鎗を打振〳〵。々々莫驚直ふ馳出れば鳴子ゑ村禽も後れ。敵を逆ハける淺羽ゑ嵐是ゑと相ゑ。主ふ叛紀ー両股武士若们ハ我敵ゑふ足ゑ。疾二犬士ゑ出ーねとゑ出せゑ果ゑ將衡村禽。鎗閃ゑーて刺んと我ゑ。高成と原弘ハ倶ふ相逆ハ鎗ゑ合ー。一上一下と術ゑ盡ゑ互ふ相知ゑる同士ゑれば後角ゑ恥朋輩の訕りゑ思ふて毫も距ゑ高成と原弘ハ既ふーて痛痍を負ひゑ。又將衡と村禽ハ敵の鎗下ふ馬ゑ斃されて倶ふ歩立ふゑ。ゑ一かと將衡ハゑ嵐高成ゑ突仆て首ゑ捕り村禽も亦淺羽原弘の吭ゑ禹詠と刺ゑ。ゑ仰反り仆れて死ーけゑ。浩処ふ寄隊の陣ゑ。金剛力士ふ異ゑゑ。猛者一騎馳出ーて既ふ退紀ゑ。ゑ將衡と村禽ゑ反賊ゑと吸ゑ。四五十介ゑ鐵撮棒ゑ。と輕ふ引提ーて馬を走ゑ〳〵ふて轂ゑんとゑ是則別人ゑ。ゑ千葉自胤の陣中ゑ本朝の呂布と負

きたる武藏千束の野武士の長上水和四郎東三是ゝ將衡と村禽八戰ひ既ふ疲
労れかども敵ふ喚れて一歩も退くべきやと相並て鎗ゝ構て立逆るゝ東三ハ物とも
せず鐵撮棒ゝて両個の敵の鎗ゝ打拂ひ駈惱して撓む村禽の兜の天邊を力ふ儘
ゝて礫と擲ゝ擲られて比田村禽の首ハ胴へ減入ゝ云ともいまだ死人でけり將衡是ふ驚
慌て一引外て逃んとせゝ東三透さず馬上よゝ鎧の總角引抓ゝ左ふ梵と引着て
鎧ゝ鳴ゝして丁と蹴る蹴られて叫ぶ將衡ハ尚鎗ゝ持ゝ三間許怪飛さまて
野中ふ立てる巨石ふ背ゝ撲せて甲も骨も碎けて息ハ絶かけ當下里見の先鋒の頭人
登桐山八郎貞干ハの為体ゝ見るふ汎堪ず突然と一て只一騎敵ふ向ひて喚るゝ
通ハ武藝勁力和主ハ誰そと問せも果ず東三眼ゝ瞪らゝく若ハ如ハ仏武者ハ
名告知ゝる我ハ敵ふも疾小文五吾ゝ出さずと罵り誇る舌も引せず良干怒て入む
眉尖刀ゝ束三ハ又鐵撮棒ゝて受流ゝ打合ゝて姑且挑ゝ戰ふ程ふ良干勢ゝ始ふ似

ず既ふ危く見えゝ満呂再太郎怵難く走り出んとせゝ小文五吾急ふ喚禁めて信
里ゝ那奴ゝ力藝和郎ゝ及ぶ所ふ非ず云ても四下ゝ伝と見るゝ這頭ふ故
ゝ樫樹ふ周匝一尺ふ餘るべき大枝這方ふ指出ゝ小文五吾ゝ見て是究竟ゝ馬ゝ
樹下ゝ乘ゝて馬上ふ其枝ゝ引ゝ撓ふ最大けれども輭弱ふ做ゝ其幹際ゝ反折て
小枝ゝ裂捨梢ゝ拂ひて長六尺許る生木の棒ふ造做ゝ挾ゝ馳出ゝ莊ふ驚ゝて
梵れども小文五吾勢ひ壯ゝ毫も諌ゝ聞ざりけり小程ふ登桐貞干ハ上水和四郎東三ふ眉
尖刀の柄ゝ打折られて克ふべくもあらざれば早くも馬ゝ無旋らゝて飛ぶ似くふ引退くゝ東
三ハ猶饒さじとゝ鎧ゝ蹴立て赴蒐るゝ小文五吾既ふ陣頭ゝ馬ゝ走らせ來て立替ふ
馬上の武者態問ハでも知る彼羽中の大鵬毛裏の猿猴人る境ふ入る如く伝と東三ゝ遮
留めゝやれ勁敵姑且止れ我ハ是里見の防禦使大田小文五吾悌順ハ爾屋我ゝ請へる
我ゝ雨ゝ知ゝ名告れくと問せもぞさて大田秋ゝ名れ兩知ゝ已樣ハ坂東隨一の

○文溪堂藏

○文溪堂藏

剛者。昔の公時義秀なども比喩るに猶過たる萬夫無當の勇士なれ。石濱殿自都に負れて
當陣先鋒の頭人る上水和四郎東二豆人狗児の素より暴惡鳥の餌ふるの如く名詮自性
只一撃に結果させん今年今月今日の正に其身の命日と自知て棒を喫ねと喧しく哮
て鐵撮棒の一撃に人と馬とを馳よとれば小文吾毫も慌ず嘿然を急造る堅木の棒を
丁々破と受流し又打合る力芸熟姚現任ある兄弟なり今防禦使の大任の
ちふみづらもの上下老若の勁敵に當りしに士卒をヨマく撃せで。と思ふ慈善に武勇を兼
なる賢者の掙紀皆実られば百の和四郎一度に向ふく勝まく也とも心ふ〜て這一犬に及
ぐ。と人に稱へ馬に嘶く自家に伝へる寄隊の士卒も皆打長視て忙然る這両雄の戰
ひ甲乙あり東二危く見えて寄隊の陣より又一騎東二を資んと最大なる鉄鐵を左の肩に
ち撫て馬を飛せて馳出けり是甚麻なる猛者ぞ并に又下の回ふ解分ると聽ねか。

南總里見八犬傳第九輯巻之三十六終